

2月1日

モーセの祈り

(申命記3:23-28)

「エホバ^{おまえ}汝らの故に私を怒り私に聴き給はない。……」(申三・二六)

モーセは紀前一二八〇年頃出エジプト以来、幕屋を張りながら、エホバの導きのもとに曠野の旅をつづけて来た。民らは乏しき食糧のためエジプトの鍋を想い出しては何でこんな旅をしなければならぬのかと咳いたり、偶像を作って宗教的姦淫の行為に陥ったりした。モーセはホレブの召命以来、神の僕として聖意に従い、み力に与^{あづか}って来た。「天にも地にもいづれの神か能く汝の如き業^{わざ}をなし、汝の如き力を有^もたんや」(申三・二四)と平伏し讃美している。そして彼は神の御力を体現し身証して来たのである。

ヨルダン川の塩の湖^{うみ}に注ぐ地帯の東方モアブのネボ山地に辿り着いたモーセは、「願わくは我をして渉^{わた}り往かしめヨルダンの彼岸なる美^よき地美^よき山にてレバノン山を望ましめ給え」(三・二五)と祈ったが、民らの不信の罪を神は怒ってこの願を聴き給わないので、モーセはピスガの山頂で贖罪的な死を死なねばならなかった。このことはしかしモーセは覚悟していた(出三三・三〇-三三、申四・二-二四参照)彼は神の言の如くネバ山の西方ピスガの山嶺で西、北、南、東を望み、イスラエルの将来を予見して魂は天に昇った。

2月2日

妬む神（エール・カンナー）

（申命記4：15-31）

汝の神^{エホバ}実存主は喰い尽くす火、妬む神である。（申四・二四）

申命記四・三一を読むと、神をなぜ「妬む神」などというかがわかる。ホレブでモーセに火の中から呼びかけた神は、靈神であり、イスラエルの苦しみを深く顧み給う歴史の神であった。またシナイ山で十言を啓示し給うた神は、「我は汝の神、汝はわが民」との契約を結び給うた人格神であった。人格関係は一对である。神と人との人格関係は拝一神の絶対性をもったものである。であるから日月星辰を拝んだら、それは拝一神の信仰的人格関係を乱すことになる（申四・一九）。また自ら造った偶像を拝むに於ては靈神を侮る宗教的な罪である（四・一六-一八）。他の民族の他神を拝んだら、それは宗教的姦淫となる。出エジプトの旅で偶像礼拝をやったので、神の怒りを招き、モーセはその罪を負わされてヨルダンを渡らずに死なねばならなかった（四・二二）。要するに他神や偶像や被造物や悪霊にイスラエルの民が心を動かし不信を犯すと神は妬むほどにイスラエルの民を愛惜する。

神の熱愛は義の故に喰い尽くす火であるので、預言者たちが「神に立ち帰れ！」と叫んだがイスラエル民族国家はその不信のためにやがて神の審きを受けて滅ぼされたが、それでも神は愛の故にこれを贖う道を拓いた。神の慈悲、契約を棄てない信愛がこの「妬む神」の深い心であった（四・三一）。

2月3日「聴けイスラエルよ！」(シェマハ・イスラエル！)

(申命記6：4-9)

四 聴けイスラエルよ！ 実存主^{エホバ}我らの神は唯一の实存主^{エホバ}なり。

五 されば汝はエホバ汝の神を愛するなり、全心全魂全力をもて！

六 されば今日我が汝に命ずるこれらの言を汝の心に在らしめよ。

七 汝の子らに繰り返し語り、而も家^{しか}に坐する時も道を往く時も寝る

時^七も起きる時もこれを語れ。

八 汝また之を手に結びて徴とし、汝の眼の間に結びつけ標識^{おぼえ}となし

九 また汝の家の柱と汝の門に書き記せ。(申六・四―九)

出エジプト記第二十章と申命記第五章にモーセの「十言」が記されてあるが、これに加えて諸々の誠命が告げられてあるのをよく憶えよ、よく遵れよとの諭である。イスラエル民族は幼年時代から、律法を暗誦させられている。この「聴けイスラエルよ！」の教節はその序言である。イスラエルにとって唯一の神エホバは実力を以て出エジプトをなさしめた力ある恩恵の神、救贖の神であるから、全心全魂全力を以て神を愛せざるを得ないのである。「神を愛すべし」という従来^{しん}の訳に対して「神を愛するなり」と断言的に表現するのが本当だと思う。神と人との信愛関係の世界は、汝と我との現在の断言的現実である。それが霊的現実であるならば、何も小箱に聖句の紙片を入れて手や額に結びつけなくてよいはずである。

2月4日

神の擇び
(申命記7:6-11)

実存主^{エホバ}が汝らを愛し汝らを擇び給うたのは、
汝らが萬の民よりも僅少^{ちひさ}きものだからである。(申七・七)

実存し給う主なる神は歴史的にアブラハム、イサク、ヤコブ(イスラエル)、ヨセフ、モーセに自らを啓示しつつ愛し顧みて来た。ここに用いられている「愛する」(ハーシャック)という語は「に愛着する」という粘着性の強い内容をもった語である。なぜそんなに愛し撰び給うたかといえは万民の中で最も「僅少^{ちひさ}き民」であるからだという。そればかりでない「項^{ぐん}の強き民」(申九・二三)頑固な厄介者だからでもあったからである。僅少^{ちひさ}で頑固な民を鍛えるのが撰びの理由であった。それには神の遠大な目的があった。人類の救済である。まづイスラエル民族を神属、民族的な「聖き民」(申七・六)「宝の民」(申七・六)とすべく、エジプトでの苦難から救贖した(申七・八)。これは父祖たちへの約束に基いた(申七・八)。

モーセへの聖なる「十言」を基とした律法^{トウラ}を示し、これを遵守すべきことを命じた(申七・一二)神はイスラエルに対して「信実の神」であるから審判と恩恵、義と愛を判然と実証し給うという(申七・九、一〇)。さてこの頑固な民は果して歴史的にこの神の撰びと愛に直線的に^{こた}応え得たか。それは惨憺たるものであった。それは実は人類のすがたを代表するものであった。神の独子の出現を絶対に必要とする所以はそこにあった。

2月5日

神の靈言と大自然の食物

(申命記8：1-5)

人はパンだけで生きるのではない。

人はエホバの口から発するすべてのもので生きるのである(申八・三)

——イエスはこの聖句を以て悪魔に^{こた}え給うた(マタイ四・四参照)——

出エジプト以来、所謂曠野^{いばき}四十年の旅路に於けるイスラエル民族の苦難はその食生活にあったに相違ない。その缺乏を補う不思議な天来の糧はマナ(マーン)であった。これは莞^{いん}の実の如きもので色はブドラクの色に似て、味は蜜の甘さをもった油菓子といったところである(出二六・三一-三五、民一一・四-九を参照)。シナイ半島の西部の産で西風に乘って天から降って来た。五、六月の交が最も豊かであった。彼らは驚き喜んで「何だ」(マンナ)と叫んだのがその果の名となったという。肉体にとつて食物は不可欠であるから、キリストの「主の祈り」にも「我らの日用の糧^{かて}を今日も与え給え」という句がある(マタイ六・一一)。しかし魂の糧を忘れたら人間は単なる動物になってしまう。魂の糧は「神の口から発するもの」にある。直訳すると「エホバの口の噴出物^{モウツツ}のすべて」である。それは神の靈言であり靈言である。普通の人間の言は意味の内容の伝達であるが、神の人イエスは「わが言は靈なり生命なり」(ヨハネ六・六三)と言ったように、神の口からの靈氣、靈言は我らを活かす(ヨブ三三・四参照)。万物を創造する(詩篇三三・六参照)。大自然とその糧も実は神の靈氣、靈言に由った。靈肉渾然たる人間は正に神の靈氣、靈言と大自然の供する糧によって健全なる生命を生き、存在そのものが神の栄光体であるのだ。

2月6日

心の割礼

(申命記30:1-20)

汝の神エホバ汝の心と汝の子らの心に割礼を施し、汝をして全心全魂を以て汝の神エホバを愛せしめ、斯くして汝に生命を得させ給ふ。
(申三〇・六)

この申命記第三十章は重厚な内容をもつ注目すべき章である。「神に立ち帰る」ということが、捕囚から故国の土地への帰還の預言と神へ民の心魂が立ち帰るといふ両面が語られている(三〇・三、五と三〇・二)。しかもそれは神の恵みの力による。その恵みの力は内的には「心の割礼を施す」というのである。割礼が何であるかは創一七・九―一四、出一二・四〇―四九、出四・二五レビ一二・三等を参照のこと。要するに契約の徴として男子の陽皮を切る祭儀である。

心の割礼は心を裂くことになる。「心を裂きてエホバに帰れ」と預言者ヨエルも叫んでいる(ヨエル二・一二)。自己や他人や偶像に捕われている心を裂いて神に帰る。それは「全心全魂を以て」全存在を以て神に回帰することである。神の義に打たれ、神の愛に圧倒されると、この回帰ができる。そうすると全心全魂全存在で神を愛し、律法を遵したがうようになる。それが「生命と福祉」の現実を齎もたらす(三〇・一五)。「心の割礼」を受けず、神に回帰せず、神を愛せず、律法を遵したがらず、となればそれは必然「死と災禍」に陥る(三〇・一五)。神に回帰するか否か、それは「今日」決せよ、と迫られている。信仰は正に「今」「此処に」の現実問題である。信仰は信行であり、信交である。信即行一如である。

2月7日

モーセの歌
(申命記32:1-43)

二
実存主^{ミツコホバ}はこれを確かと囲み、深く顧み、おのが瞳^{ひとみ}の如くこれを護り給うた。

二
鷺^{ササギ}がその巢^うを看守り、その雛^{ひな}の上を飛びめぐり、その羽^うを拡げてこれを攫^{とら}へ、その翼^{よく}に載せてこれを荷^いいあげる如く！(申三二・一〇下、一一)

申命記第三十二章一—四三節は、モーセにその名が帰せられている作者不明の名歌。出エジプト後の曠野の旅の恵みと約束の地に於ける恩沢にも拘らず、神に叛^かいて他神、偶像を拝した民の不信不義への審判も歌われている。この詩はイスラエルの相^{あひあひ}であると共に個人及び人類の在り方への警告の預言である。上掲の句の他に重要な句を訳出しておく。

一天よ、耳傾けよ、我れ語らんとす。
彼こそは汝の父にして汝を贖ひ、
彼こそは汝を作り汝を礎^{いし}え給ひしに非ずや！
地よ聴くべし、我が口の言葉を。

二わが教へ雨の如く降り

わが言葉霧の如く零れん、

若草の上にかかる霧雨の如く、

青草の上に濺^{しず}ぐ白雨の如し。

六汝^{ミカバ}ら実存主^{ミツコホバ}に斯く報いんとするや、

愚かにして智慧なき民よ！

一八汝を生みし巖^いを汝は疎んじ、

汝を転^まび出だせし神を汝忘れたり。

三九汝^{ミカバ}ら今ぞ見よ、我れ、我れこそは彼なり、

わが傍らに神は無し！

我れは殺し、また活かす、撃ちまた我は癒す、

わが手より奪ひ去り得る者有らず。

2月7日

(詩) わが人生

作詞1984.1.10

歌調一高寮歌「曉寄する新潮の」

——1904年のこの日に生を享けたので、自己紹介的告白をさせていただく——

1.

明治は三十七の年 日露開戦その前夜
如月の星閃めければ 彌生が岡に産^{うぶ}聲^{こゑ}を
あげて生^うれにし吾れなるか

2.

幼き時に父は去り 母は五人の遺児^{こりご}抱え
お茶の水なる女子校に 教育の道^{みち}励みつつ
われらをよくぞ育てたる

3.

我は弱虫泣虫の 寢^ね「づくなき」児なりけり
さはれ真善美に対し 感激性の浅^{あは}からぬ
夢ゆたかなる少年よ

4.

同心町の二階屋に 舎兄政美と暮しける
附中時代の生きざまが 髣髴^{ふふせつ}として目交^{めかい}に
現前するかな感無量！

5.

長兄北京に仆れたり 母は船路に失明す
次兄の忍苦いかばかり わが青春の暴風雨^{あまふゆ}なり
天地晦冥どん底よ！

6.

水戸高校の時にして 大手町なる内村の
聖書の講義胸をうち 光を浴びて信ぜしは
二十^は歳^とに満たぬ時なりし

2月7日

(詩) わが人生

作詞1984.1.10

7.

病の波に襲はれて 惨憺たりし四年間

聖書とルッター、ヒルティエを 灯火として辿りける

孤独旅路を忘れめや

8.

東大独文学窓は 古典の粹たるゲーテ、シラー、

ダンテとミルトン、欧米の 詩歌の世界に憧憬て

日に夜を継いで読み耽る

9.

藤井の門下五星霜 主の日遵りて貫きぬ

噫、千九百三十年 内村、藤井仆れたり

み空に點る巨星二つ

10.

阿蘇の深山の瀧見荘 聖靈降臨、新生よ!

使徒らの次元慕はしや 十字架・聖靈の現実を

生涯を賭けて生き貫かん

11.

大道無門キリストの 無者たる実存賜りて

左顧右眄なくわれは往く 万人を抱くキリストの

無量の愛ぞ力なる

12.

八十路の峠を迎へたり 無尽の涙を靈泉とし

漲る血潮を靈火とし 吹き捲く聖靈を台風とし

一大詩篇は成りゆかん!

2月7日

(詩) 使徒らの昔を慕いて

作詞1979.12.9

歌詞 s.359「夕陽はかくれて」

1.

使徒らの昔を 慕いて我は
聖書に読み入り 祈りてあれば

《おりかえし》

み霊の我が主は わが身を抱き
十字架に耐え得る 力を賜う

2.

聖書の現実^{うつつ}は 次元の高き
み霊のたばしる 生命の世界

3.

主の日を^ま選りて 戦いあれば
聖霊も呻きて 執り成し給う

4.

聖旨のまにまに わが業^{わざ}をなし
主に在る生きざま 貫き往かん

5.

わが世の旅路も 日暮を迎え
夕の鐘の音 暮韻^{ぼいん} 嬌々^{じょうじょう}

6.

終末の峠^{おかり}を 踏み越え進み
星のしるべにて 峻路を往かん

7.

常世の晨の 明くるときには
天使天降りて 昇らせ給え!

2月8日

我汝と共に

(ヨシュア記1:1-9)

我れモーセと共に在りし如く汝と共に在らん。
我れ汝を離れず汝を棄てじ、雄々しかれ、勇敢なれ!

(ヨシュア一・五下、六上)

「エホバの僕」モーセは、ピスガの山嶺から昇天する前に、忠実なる後継者ヨシュア(エホバは救なりの意、新約の「イエス」の語源)に按手をして神靈のバプテスマを施した。モーセは預言者(広義)の最大なる者であった(申三四・一〇)。エジプトの王の面前での不思議な業、出エジプトの大業、シナイ山上の「十言」の下賜、曠野の旅を「エホバの幕屋」と共に貫いたこと、等の実存を見れば、モーセが大預言者たることはまちがいない。

またエフライム支族のヨシュアはユダ支族のカルブと共に曠野の旅でモーセに忠信を貫いた。一般の民の如く咳いたり妬んだり諍たりしなかった(民一四・六、三〇、三八)。カナン侵入の期を前にして斥候をした群にこの二人はいた。エシコル(一房の葡萄)の谷を涉るとき、扛に葡萄の房を通して二人で担いだことであろう(民二三・二三、二四、一四・三〇、三八)。モーセに按手され、神から「我れ汝と共に……」の右掲の聖言をいただいたヨシュアは雄々しからざるを得ず、勇敢ならざるを得なかった。

私事で恐縮だが、二十七歳を一期として北京で仆れた舎兄政美の死は私に決定的なものとなった。爾来この天童の生涯は福音のための弔合戦である。キリスト直結の使徒的信仰(行)を賜ったので、使命のかぎり、十字架・聖霊の絶対恩寵の現実を身証し貫かんのみである。

2月9日

エリコ城下町の
遊女ラハブ

(ヨシュア記2:1-24:6:15-24)

妾^{わたし}らこれを聞くと心は溶け、人霊^{たましひ}は消えちやいました！

それは、エホバあなた方の神様、あのお方^{かた}は天上天下の神様だからです。(ヨシュア二・一二)

ヨシュアはエリコ攻めに先立ち二人の間者を遣わした。二人は遊女ラハブの家に忍び込んだ。これを探知してエリコ王の使者がやって来た。ラハブは家には居ないから急いで追跡しなさいと答えた。斥候の二人は屋上の麻束^{あは}の中に囲^{かこ}われていたのであった。ラハブは既に行商人たちから、出エジプト以来のエホバ神のみ業、み力、モーセのことなど聞き及んで驚嘆驚倒していたのである。右掲のラハブの言はその告白である。彼女はエホバがこの「約束の地」をイスラエル民族のものにすることを信じていたので、二人を囲^{かこ}まったのである。時を見はからって二人を縄で窓から縋^つおろして遁れさせた。生命には生命で、二人との間にラハブ一門の者たちを救ってもらう約束はしてあった。二人は無事帰還して詳しくヨシュアに報告した。

ヨシュアはやがてヨルダンを渡り、かの有名なエリコ城壁七巡り、ヨベルの角笛の吹き鳴らし、地響きのする脚波と関の声で城壁の崩壊というエリコ攻めは成った(ヨシュア第六章)。

遊女(ヘブル語「ゾーナー」ギリシャ語「ポルネー」ラーハブ(「広大な」の意)はやがてサルモンと結婚。これがイエスの祖先だからラハブは選ばれた女であった。問題はしかし生れがどうの職柄^{しご}がどうのではない。神信交の人に化したかどうかだけである。「遊女は汝らより先に天国だ」とキリストは言い給うた。



(ヨシ2：1-18) エリコの遊女ラハブはヨシュアの斥候二人を縄で窓から縋りおろし、
遁れしめて救った

2月10日

ヨルダンを渉る

(ヨシュア記3:4)

エホバの契約の櫃はこを昇あいだ祭司等ヨルダンの中の乾いた地に堅く立つて居てイスラエル人みな乾いた地を渉りゆき、遂に民悉くヨルダンを渉りつくした(ヨシュア三・一七)。

ヨルダンと塩の湖を越えて西の方カナンかなんの地を諦念と希望の念いを以てうち眺め、神の約束を信じてモーセはヨシュアに按手をなし、一切を彼に託してその魂は天に昇った。ヨシュアはモーセを通して神のみ霊の力を受け、勇み立ってヨルダンに向った。神エホバの「契約の櫃」(アローン・ベリート)を祭司等に昇がせて先頭に往かしめた。彼らの足の跡がヨルダンの水の中に踏みとどまるとヨルダンの流れが止まった。そこでイスラエルの民は乾いた川底を徒ち渉り尽した(三・一七)。十二支族から一人づつ選ばれた十二名の者が、祭司たちの足もとから石十二個を拾って各々肩に負って記念の十二石とした。

出エジプトの際に蘆の海の水が二つに分れてイスラエルの民はそこを渉った。此度もヨルダンの流れが止って民が渉った。「出エジプト」が歴史的な救贖であったように、「ヨルダンを渉る」は歴史的な聖地入りの第一歩である。それはシーザーがルビコンを渡った時の決戦への進撃に優る内容のものであった。今私は「聖地入り」と言った。ヨシュアは約束の地を神の民のものにするまで幾つも戦を勝ちとらねばならなかった。その後この約束の地は多くの悲劇の歴史を経て、千余年後に預言者たちの悲願に於いて聖国を地上に体現した人が現はれた。新約のヨシュア(イエス)であった。

2月11日

エホバ
実存主か他神か
(ヨシュア24:1-28)

「汝ら若し実存主に仕ふることを惡しとせば、汝らの先祖が河の彼岸にて仕へし神々にもあれ、または汝らが今居る地のアモリ人の神々にもあれ、汝らの仕ふべき者を今日選べ。但だ我とわが家とは実存主に仕ふ。」(ヨシュア二四・一五)

モーセに従つて出エジプトをしたイスラエルの民はヤコブ・ラケルの子ヨセフ支族を中心としたもので、彼らはヨシュアを主領としてカナン進入をなし征服を遂げた。ところがヤコブ・レアの六支族ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンを中心としたものはカナンを中心とした諸地方にも居たようだが、サマリア地方のシケムを聖所としていたのである。彼らの神はヤコブの賜ったイスラエル(神戦い給う、統治し給う等の意)の名の起因たるエール(力ある者の意)神であつた。ヨシュアはカナンを征服し、全十二支族の統合、連合の期が熟したので、先づ信仰上の決断を問ふ必要を感じて、上掲の如く忌憚ない心根を尋ねたのである。これに対して諸族は挙つて「我らはエホバを棄てて他神に仕ふことは断じてせじ」と答へた(二四・一六)。

かくて十二支族の「宗教聯合」(Amphiktyonie)が成り、シケムが依然として聖所となった。これによつて見るも他の諸支族がモーセに由来するヤハウェ神とヤコブに由来するエール神とは呼名は異つても神そのものは全く同一であることがわかる。我々に於ては実存主は正に主イエス、贖主キリストである。而も彼は全世界的、宇宙の実存、聖霊として遍在、内在し給う。

2月12日

ギデオン（上）：平安の神
「エホバ（ヤハウエ）シャーローム！」
（士師記 6：1-24）

エホバ彼に言ひ給ふ「平安汝に在れ！ 怖るな、汝死せず」、かくてギデオン彼処にエホバに祭壇を築き、之をエホバ・シャーローム（平安の神）（平安「在らしめ給う者」と名づけた。り。（士六・二三、二四）

ヨシヤアによつて約束の地カナンは一応イスラエル民族の勢力下に入つたが政治的統一の段階ではない。彼の歿後、士師時代（二二〇〇年頃—一〇二〇年）が続く。士師とは審判者等のこと。彼らは「エホバの靈これに臨む」ことによつて神に撰ばれたカリスマ（靈賜）的、指導者で智慧と力のある人物で非成文律的な民事審判をした。彼らの中の著しい二人を挙げればギデオンとサムソンである。

イスラエル民族は信仰の民ではあるが脚どりがどうも蹉蛇たるもので「エホバの前に惡をなした」。そのため東方の遊牧民ミデアン人によつて神罰を受けた（六・一、二）。しかし目がさめて「神に祈り呼ばはると神は応へて下つた」（六・七）。人間はこういったものだ。大切な一事は神に立ち帰ること！

かくて神に撰ばれた士師がマナセ族のギデオンであつた。神の使者が現はれて「剛氣な勇士よ、エホバ汝と共に在ます」と確言する（六・一二）。だからミデアン人を征服せよと激励される。彼は自分はそれに値しないという（六・一五）。神様が力を下さると言われるなら証拠を見せて下さいと迫る。ギデオンは神の靈頭に接したので畏れた。そこで神は右掲の如く言つた。それで彼は平安を与へ給う神をからだで知つた。神と平安關係に入ると限りなきみ力に与かる！ 平安！ シャーローム！ はイスラエル人の日常の挨拶の言で、その歴史的な由来はこのギデオンへの神の言である。



(士6：16—24) ギデオンの召命：エホバの天使現れて不思議な火の徴を見せる。
エホバの声：心安かれ怖るな汝は死なじ。ギデオン祭壇を築きエホバ・シャローム（平安の神）と名づけた

2月13日

ギデオン（下）

精銳三百

（士師記 6：33—8：35）

三隊の兵隊ども角笛を吹き、壺をうち砕き、弓手に燈火を執り馬手に角笛を持つてこれを吹き、「エホバの剣、ギデオンの剣なるぞ！」と叫んだ。（士七・二〇）

エホバの力ある平安を賜ったギデオンは油然たる神気を以て偶像教と戦う。即ち領内にある男神バアルの祭壇をこぼち、その傍らの女神アシラの像を折り倒した。

ギデオンは東方のミデアン主力軍と戦うべくエズレルの谷の東南東ハロデの泉のほとりに陣を布いた。その総勢三万余名。エホバは彼に精銳のみにすべき旨を告げ給う。即ち凡そ戦意なき者を故里に帰らしめたが尚一万名が残った。エホバは彼らに谷川の水を飲ませ、犬の如く呑む者は不可なりと宣げ給うた。手に水を掬して飲んだ者は僅か三百名であった。ギデオンはこの三百の精銳と共に戦うこととなった。百名に一人の厳選となった。

古来、戦は奇襲に如かずで、三百名を三隊に分け、夜襲する戦法となった。普通は一隊に角笛一個であるが、各人が角笛と燈火をかくした壺を持ち、夜半敵の寝込みに乗じて、「エホバの剣、ギデオンの剣なるぞ！」と関の声諸共に各兵が角笛を高らかに吹き鳴らし、壺を打ち砕き燈火を掲げて躍り入った。敵は眼が眩み、同士撃ちの大混乱となり、大敗北を喫した。これこそ空手戦法の勝利である。

さて我々福音戦の角笛は何か、神言張る讚美歌の高唱ではないか！ 燈火は何か、胸に点る聖靈の火ではないか！ 砕かれた壺は何か、献身の我そのものではないか。かくて主の精銳たらん。



(士16：18-21) デリラに頭髪を切り落とされて力失せたサムソン、捕らえられて両眼をえぐり取られる（レンブラント）

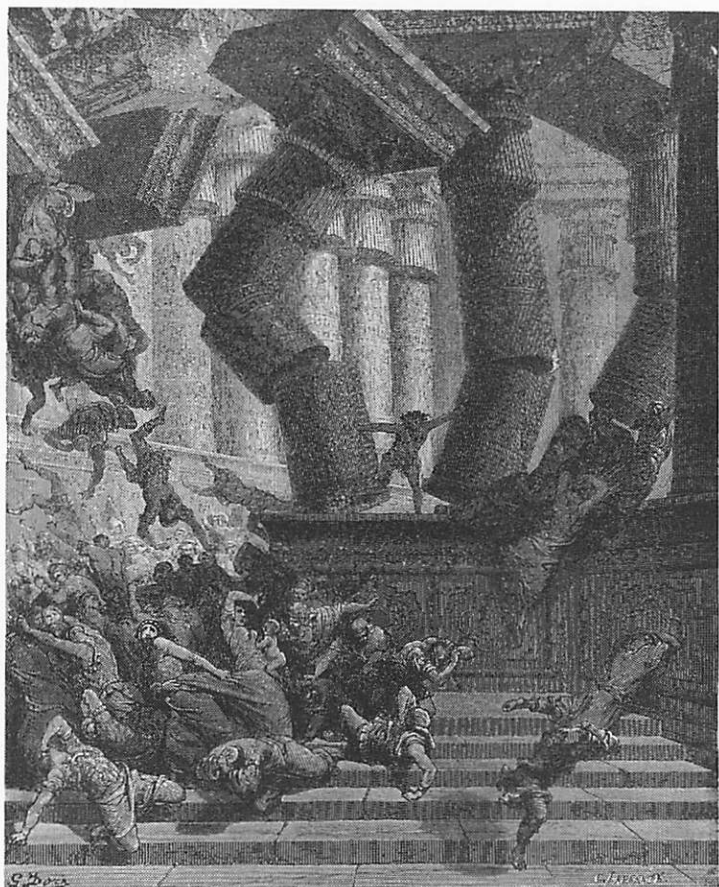
2月14日

サムソン (上)
ナザレ人サムソン
(士師記13-15)

「視よ、汝は孕んで子を産む、その頭には剃刀を当てるな、その児は胎を出てから神のナザレ人（献身者）なるぞ」（士一三・五）

イスラエルの民は例の如く「エホバの前に悪を行った」のでペリシテ人の掌中に陥った。ダンの族のマノアの妻にエホバの使者が現われて、お前は石婦だが今に孕んで子が産れるから、酒をつつしみなさい云々と右掲の如く告げた（士一三・五、七）。この逞しい天使が再現したとき、マノアはその名を訊ねた。すると「私は不思議という名だ」と答えた（士一・一八）。彼はマノアとその妻の備えた祭壇の火を通して天に昇ってしまった。何か天的な使命のある人物の生誕のときは、よく母親に不思議な異象や天来の告示が臨むものである。このサムソンもそのようにして出現した児で、「死に至るまで」ナザレ人であると告知されたのである（士一三・七）。原語は「ナーズィール」で、神の使命により専ら神に「献身的に仕える者」の意である。

剛力のサムソンはペリシテの女との結婚問題を契機として相次ぐ事件に於て「エホバの霊」の助力によってものすごい怪力を揮う。即ち若獅子を小山羊の裂く如く裂いてしまったり（士一四・五・九）、その獅子の屍の蜂蜜の一件から三十人を殺したり（士一四・一〇・一八）、山犬三百を捉えて二匹づつ尾を結び火炬を点じて麦島を焼き払ったり（士一五・一・一八）、驢馬の腮骨で一千人のペリシテ人を撃ち殺したりした（士一五・一四・一八）。サムソンは原語ではシムション（太陽児）で、エホバの光を浴びていた。



(士16：25—30) ベリシテ人の神ダゴンの祭りに際して大殿堂の柱を倒し、身を以て復讐を遂げたサムソン（ドレー）

2月15日

サムソン（下）
盲者サムソン
（士師記16）噫主^{アドナイ}ヤハウェーよ！

我を覚え給へ。噫神よ、此度こそは我を強めて、わが両眼の一つの為にもペリシテ人に仇を返さしめ給へ！（士

一六・二八）

サムソンはペリシテのペンタポリス（五市）の一つガザに出かけて、その遊女と交つたが彼を捕へんとした者に怪力を示して啞然たらしめた。その後ペリシテの艶麗の女デリラと交つた。彼を捕へんとした敵の三度びの縄縛も彼は難なく断ち切つた。群伯の金に動いたデリラは彼の怪力の由来を遂に彼から聴き知り、彼を酔わせ、膝枕で眠らせ、彼の頭髮七縷を斬り落させた。力失せたサムソンは捕はれて残酷にも両眼を摘抉され、脚は銅の鍵に繋がれて囚獄で挽磨の労に服せしめられた。頭髮は再生！

ペリシテの群伯はその偶像神ダゴンの祭を催し、大殿堂の演技場でサムソンに演技をさせて侮辱の喝采を浴せていた。サムソンは大円柱二基に身を寄せるや満身の神の力で両柱をひしめき倒した。大棧敷の三千余名の観客は時ならぬ霊震のため墜落死や圧死で失せた。その最後の瞬間に絶叫したのが右掲の祈りであった。彼は実に死を以て復讐を果たした。盲者サムソンは正に神の猛者としてナザレ人の本質を証した。噫情熱の人サムソンよ！

「総ては最善、縦ひ時に疑ふとも、至高の知慧の測り知れぬ配剤はいや果てにはつねに最善なりき」（私訳）失明の大詩人ミルトンの劇詩「サムソン闘技者」のこの句はサムソンと合体した詩人自身の血と涙を突破した告白である。

2月16日

モアブの女ルツ

(ルツ記1-4)

ルツは言った「私は貴方^{あなた}が往かれる処へ往きます、貴方が宿られる処に宿ります。貴方の民は私の民、あなたの神様は私の神様でございます」(ルツ一・二六)

士師サムソンの治下、紀元前一〇〇年前後にユダの高原地帯に饑飢があつた。ユダ族のエリメレクはその妻ナオミと二人の息子マロンとキリオンを伴れてベツレヘムを立ち出て死海の東に浜するモアブの地、歴史的にはユダ族とは折合のおもしろからぬ地に寄寓した。マロンはオルバを、キリオンはルツを娶つた。いづれもモアブ族の女である。十年の結婚生活は恵まれず、いづれの夫も子なくして死んだ。先にナオミは夫に死に別れたので悲歎やるせなく帰国の途に着いた。姑ナオミは二人の媳^{よめ}に夫々実家に帰つて新家庭をつくるように勧めた。しかし二人の媳は離別の接吻に慟哭してお返しをしなかつた。更に懇切に諭されたので、オルバは再度の接吻に涙をふるって立ち去つたが、ルツは涙の下から右掲の如く真情を吐露した。更に彼女は姑の靈場に自分も葬られたい、死別でなくて、自分が別れたら、エホバの神様がどのように自分を処罰なさっても可いですと告白した。姑と媳との何たる相互の美しい思い遣りと熱い信愛であるか！二人は大麥の收穫時の頃ベツレヘムに帰り着いた。同じくユダ族であの遊女ラハブの夫サルモンの子ボアズの篤い好意に巡りあつて、ルツは竟にこのボアズと結婚した。ルツはダビデの曾祖母となつた靈しき摂理よ。モアブの女ルツの愛と信仰よ！

2月17日

ハンナの讃歌

(サムエル前書 1: 1-2: 10)

エホバの如く聖き者無し、^げ実に汝の他には何ものも無し、我らの神の如き巖^{いわき}は無し (サム前二・二)

十二支族の一つヨセフ族の出身エフライム族の名に因る山地、レビ族のエルカナにハンナ (恵みの意) とベニンナの二人の妻がいた (アブラハムやヤコブのように)。後者には子女が与えられたが、前者ハンナは石女であった。ハンナはシロの聖所へしばしば出かけて切願した。「万軍のエホバよ、もし誠に婢^{わかし}の悩みを顧み、婢を憶い、婢を忘れないで婢に男の児をお与え下さいましたら、その子を生涯エホバに捧げ、剃髪^{かみ}刀^{はきり}をその頭髮^{かみ}に当てません」と誓った (一・一)。ある時、彼女は深く祈り込んで異言状態になった。祭司エリも彼女のため執り成しの祈を捧げた (二・二一)。終に男児が与えられたので、その名をサムエル (シエム・エール「神に聴かれたり」の意) と名づけた。イスラエルでは石女は非常な恥とされていたが、そのような女がしばしば反対に魂の純な敬虔な女性であった。父祖ヤコブのラケルもそうであった。さて「ハンナの讃歌」は内容の深い讃歌で、自分の個人的体験から、エホバとイスラエル民族の霊的、人格的、劇的關係が謳われている。単なる誕生の感謝ではない。右掲の「実に汝の他には何ものも無し」の一言の如きは、エホバが一切であると叫んで、全幅の信頼、神との一如的境地を表現している。また結句第十節はメシヤ預言をおのづから含んでいる。そしてこの「ハンナの讃歌」(二・一〇)にはイエスの降誕のあとの「マリヤの讃歌」が照応している (ルカ一・四六―四五)。

2月18日

天童サムエル
(サムエル前書3)

神の燈火ともしびは消えやらず、サムエル、エホバの神殿に臥し居れり、そこは神の櫃はこの場ばなりき。かくてエホバ、サムエルを呼び給ふ。彼答ふ「見給へ我也」。(サム前三・三、四)

天童サムエルは乳離ちばなれたので、母ハンナが神に誓った如く神殿奉仕の生活に入った。彼は神の契約の櫃はこが安置されている傍に臥して寝るのであった。神火が点ともっている、夜は更けてゆく。「サムエルよ！」声がする。彼は起きあがって祭司エリの処へ飛んで行った。「私呼びはしないよ、行つて寝なさい」。こんなことが三度あった。そこで祭司エリは神さまが彼を呼び給うと知り、こんど呼ばれたら、「語り給へ、僕聴しこく」と答へなさい、と教へてやった。果然四度目のみ声である、「サムエルよ、サムエルよ！」「語り給へ、汝が僕聴しこきまつるなれば」。(サム前三・一〇)

エホバは祭司エリ家衰亡に關はる預言をサムエルに語り給うた。サムエルはこれを悉くエリに語った。エリは既に老衰で眼も霞んでいた。天童サムエルはぐんぐん成長した。神は恒に彼と共に在り給ひ、神の一言隻句も空しく地には隕はらわたちず、サムエルの腹はらに蔵おさまった。北はダンから南はベエルシバまで、全イスラエルに、サムエルがエホバの預言者たることは自明のこととなった。エホバの聖言はシロの聖所でサムエルに啓示され全イスラエルに伝へられるのであった。この天童サムエルに似た少年が日本の何処かに居る。

2月19日

エベネゼル（助けの石）

（サムエル前書4-7）

サムエルは石を一つ採ってミヅパとシェンの間に据え、其の石をエベネゼル（助けの石）と呼び、これまでエホバは我らを助けてくださった、と言った。（サム前七・一二）

不倶戴天的な敵ベリシテとイスラエルの戦がまた始まった。両軍の布陣はエルサレムの北方地帯であった。イスラエル軍がエフライムの聖所シロから神の契約の櫃を昇ぎ出して来たので陣営は喊声にどよめいた。ベ陣は逆に猛勇を振ってイ軍を撃破した。而も神の櫃を奪って祭司エリの二子を殺害した。その報に接してエリは驚愕して墜死した。

さてベ軍が奪った神の櫃はアシドドに運ばれ偶像神ダゴンの傍に置かれた。そのためダゴン像は再度地に倒れ毀れてしまった。而もアシドドの人々に腫物が生じ苦んだ。神の櫃はそこでガテに移され、更にエクロンに移されたが、次々と同様な神の櫃の祟りになやまされた。竟にベリシテの五市（即ち北から菱形に並んでいるエクロン、ガテ、ガザ、アシケロン、アシドド）が相議つてエホバに過祭、燔祭を以て供養した。神の櫃は遂にエルサレムの西方キリアテヤリムの山上アビナダブの家に安置された（七・二）。サムエルはイスラエル全家に信仰復興を促がした（七・三）。更にミズパに参集させて断食を以て祈りを捧げた。ベ軍がまた攻めて来たが、天来の雷撃のもとイ軍はこれを撃退した。この決定的勝利を記念してサムエルは記念石を建てて「助けの石」（原語はエベン・ハーアーゼル）と呼んだ。その後サムエルの生涯の間イスラエルは護られた。我々にとっての助けの石は生ける石、活かす石なるキリストで在り給う。

2月20日

驢馬を捜して王と成る

(サムエル前書 9:10)

6 神の御霊汝に臨み入りて彼らと共に預言し、変りて別人と成らん。
7 是らの徴汝が身に起らば手当り次第に事を為すべし、神汝と共に
在ませばなり。(サム前一〇・六、七)

ベニヤミン支族の豪傑キシの息子サウルは美しい巨人であった。父キシ驢馬の一群を見失い、サウルと一人の従僕を驢馬捜しに遣わした。さがしあぐんでサウルは帰ろうとしたが、従僕はこの町に神の人がいるから探ねて教へてもらおうと言って、昔の先見者(ポルテ)當時の預言者サムエルを尋ねた。サムエルはその前日既に神から示されて、サウルの現在、将来の預言を賜っていた。丁度新約のサウル(後の使徒パウロ)のことが聖霊の人アナニヤに示されたように(行伝九・一二九参照)。サウルは驢馬の行方を聴きはしたが、自分は最も小さいベニヤミン族のまた最も小さい家族の息子であるのにイスラエルの王にされるとはとんでもない話だと思った。しかしサムエルは神の啓示の如く祈りを以てサウルの頭に橄欖(オリーブ)の膏を注ぎ神の霊を授け、接吻を以て祝福した。かくてサウルは右掲のサムエルの言の如く別人となった。サムエルはミヅバに民を参集せしめ、神の前でサウルを王として紹介した。民は異口同音に「王の生命長かれ!」(万歳!)と叫んだ。神霊が臨むと確かに本質的に別人、第二の我、新人に成る。新約でキリストの聖霊が臨んで使徒たちはあのように別人と成ったのである。現在も同じである。故に預言者や使徒の次元に還らんと私も叫んでいるのである。

2月21日

祭儀か信従か
(サムエル前書13-15)

サムエル言へり、「エホバ燔祭と犠牲^{いけにえ}を嘉^{よみ}し給ふこと聖声に聴き従うに如^しかんや。それ順ふことは犠牲に優り、聴くことは牡羊の脂に優るに非ずや」。(サム前一五・二二)

エレサレムの北方ベニヤミンのギベヤ生れのサウルはサムエルに背^{あが}り、神の霊を主体とする別人となり、やがて民の願いとサムエルの執成しによってエフライムのギルガルで人生の三十路の峠を迎へた頃単立王朝初代の王となった。それは紀前一〇二〇年頃であった。サウルはエホバの命令に従って動き、アンモン、アマレク、ペリシテ等の近隣の敵と戦を次から次へとやり、勝ちましたが、神命に必ずしも全的に従わず、戦利品を取ったり、エホバに燔祭や犠牲の祭儀などを行じたりした。それでサムエルに、神命を全的に遵^{したが}っていないから遠からず王位を退かねばならなくなると預言される(一三・一二)。またアマレク討伐のあとでも右掲の注目すべき言を以てサムエルに責められた。サウルはその後如何なる悲劇的運命を辿って仆れるか！

本当の宗教は祭儀ではない、神命信従、聖意体现にあることを言明したサムエルは誠^{まこと}に先覺的預言者であった。我々個人の人生に於て、神命第一を主眼とし、導きの星光として歩むことである。躓いても転んでも滑っても、その心根で歩むことである。そのことを可能ならしめるものは聖霊の力である。キリストに祈入してみ霊の力にあづかつて進むに如かず。どの道、人生はドラマである。神命神意第一を以て貫かん。

2月22日

ダビデの召命

(サムエル前書16；1-13)

神^{エホバ}サムエルに言ひ給ふ「人の見るところは不可なり、人は眼を見る、されど、神^{エホバ}は心を見るなり」(サム前一六・七下)

アダムが神命に反いて禁断の果を喰って樂園喪失の悲運を喰ったように、サウルは神命に反する行為のために神霊から離れた。そこで神はサムエルに告げ給う、「我汝をベツレヘムの人エサイの許に遣わす。そは我れその子らの中に一人の王者を訊ね得たればなり」(二六・二)。サムエルは神命により、憤^{こゝろ}を犠牲として捧げるエルサレムにエサイとその子らを招いた。サムエルは長男エリアブを見てこれが択ばれた王者かと思つた。さすがのサムエルもその外貌に捕われた。そのときエホバは右掲の聖言を発した。「人は目を見る」とは外貌のこと。或はこの原語は「目で見る」とも解し得る。「心を見る」も「心で見る」とも謂えよう。次男、三男と七男まで見たが神の声が臨まない。サムエルはこれでみんなか、と尋ねたら末っ子が居る由。それは羊を牧^かつていゝので呼んで来た。これを見てエホバは「これに荷^{あや}を濺^{あや}げ、是れ其の人なり」(二六・二)と言ひ給うた。サムエルは荷の角^{つゝ}を持って来て荷を濺いだ。(原語マーシャハ。その名詞がマーシアハ、メシヤ、ギリシヤ語のクリストス、「荷濺がれたる者」、受靈者)。この少年こそダビデであつた。ダビデは眉目秀麗、容姿端麗の美少年であつたが、心は更に情感豊かな好男児であつた。

2月23日

ダビデの立琴

(サムエル前書16:14-23)

神「から」の「悪」霊サウルに臨みけり。かくてダビデ立琴^{キンノール}を執り、その手もて弾きければ、サウル慰めを得、快くなり、悪霊彼より離れ去りたり(サム前二六・二三)

エホバのみ霊がサウルから離れ去つたら、エホバから悪霊が臨んで彼を悩ました(二六・一四)という。それは一種の神罰で、悪霊が直接に神から来るわけではない。神のゆるしのもとに悪霊がはたらくのである。サウルはこの悪霊に憑かれた苦しみから遁れたく、立琴を弾く名手を求めた。すると或る若者が、ベツレヘム人エサイの子ダビデは巧みに立琴を弾くし、彼は豪気能弁の美男児で、エホバが彼と共に在ます選^{選ば}びの器だ、と言つた(二六・一八)。そこでサウル王はエサイにダビデを牧場から呼ぶようにたのんだ。サウルはダビデを愛し、王の武器を執る者即ち侍従武官に起用した(二六・二二)。

ともあれ、ダビデが神霊に満ちて即興自作の讚美歌を歌いつつ立琴^{キナ}を奏でると、サウルは感動して、悪霊が彼から追い出された。しかしサウルが神に全存在を以て立ち帰らぬ限り、悪霊は妖雲の如く去来するのであった。このキンノールは「ダビデの立琴」^{ダビデのキナ}とも称される重要な絃楽器で、カインの後裔ユバルを元祖とする(創四・二二)。

宗教改革者ルターはサタンが襲つてくると、自作の讚美歌を自ら琵琶^{ツィンバ}(ギリシヤ語、キタラ立琴)伴奏で歌つて退散させるのであった。み霊に満ちて神・キリストを讚美するとサタンは必ず退散する。「サタンは音楽がきらいだ」とはルターの言である。

2月24日

ダビデとゴリアテ

(サムエル前書17)

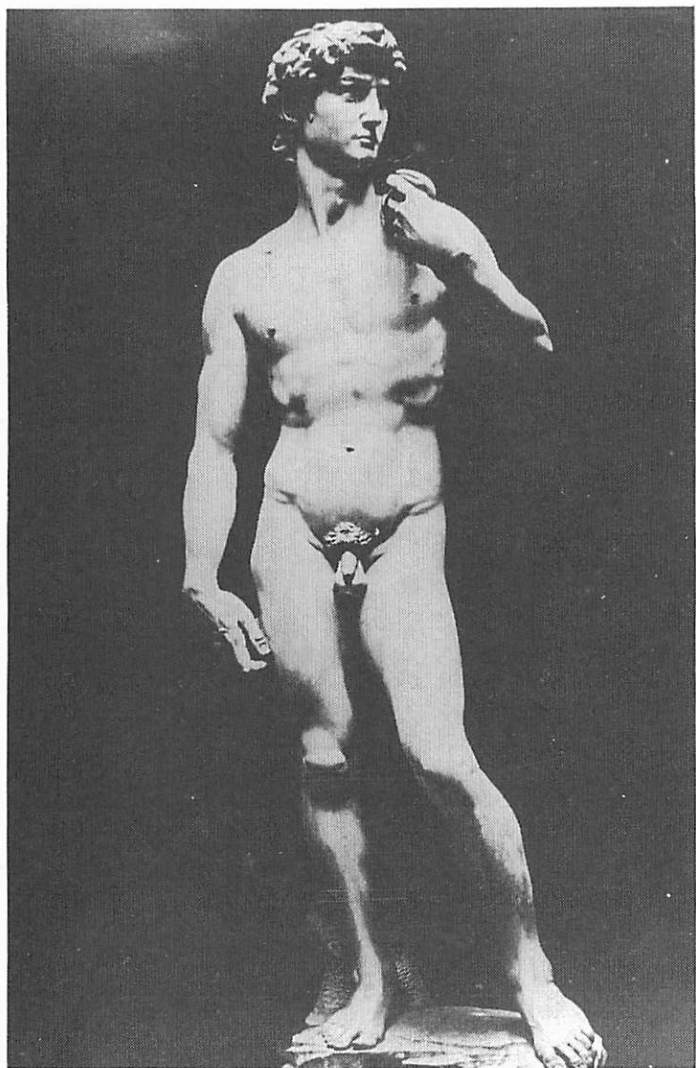
ダビデ「汝は劍と槍と矛をもて我に來たる。

されど我は万軍のエホバの名をもて汝に來たれり」。

(サム前一七・四五)

イスラエル軍の宿敵ペリシテ軍との関ヶ原的な決戦をペリシテの巨漢ゴリアテの挑戦によつて、而もそれは一騎打ちで決せんというのであった。身長六キュビト半即ち三・二五米のゴリアテは銅の兜、その重さ五千シケル即ち八十斤の鱗綴の鎧を身にまとい、重い鋒をもった槍と長劍を携えている。正に怪物的な体軀である。サウル王もイスラエル全軍もこの挑戦に驚き懼れた。両軍はベツレヘムの西方のエラの谷間の東西の岡に相對して布陣していたのである。

父エサイに呼ばれてダビデは牧場から馳せつけて、サウル王に面接した。ダビデは王に、何も落胆することはない、僕が彼と一騎打ちをする旨を言上した。サウルはお前のような少年があゝの戰士に勝てるか、と。ダビデは羊を護つて獅子や熊を殺した武勇を語つた。サウルはそれでは往け、エホバ汝と共に在ませと言つて激励した(一七・三四—三七)。ダビデは鎧も兜も要らない。手に杖と谿間の石ころ五個と投石索を持つて立ち向つた。ダビデとゴリアテの言ひ合いが面白い(一七・四三—四七)。互に近づいた。距離は好しと見たダビデは電光石火の一石を投じた。ゴリアテの前額眉間に突き入つた。彼は地響きを以て仆れた。正にダビデの神技は、動く金的を射抜いた。右掲の一言の如く、「エホバの聖名」と靈然一如の彼の戦であつた。無者ダビデよ!



(サム前17：31—54) ゴリアテに向かうダビデ

2月25日

ダビデとヨナタンの刎頸の交

(サムエル前書18-20)

ヨナタンがダビデに言った、「^レ往けよ！ 安心して。我ら二人はエホバの名に在って『エホバいづまでも私と君の間に在まし、私の子孫と君の子孫の間に在ませ！』と言って誓ったのだからね！」(サム前二〇・四二)

サウル王の子「ヨナタンの心ダビデの心に結びついてヨナタンは自分の生命のようにダビデを愛した。」二人は生命賭けの契約をした。ダビデは敗北を知らぬ勇士たることを実証するのでサウルは彼を隊長にした。ベリシテ軍を惨敗させて凱旋してくると邑々の婦女どもが歌えや舞えやで歓迎して「サウルは千をうち殺し、ダビデは万をうち殺す」(二八・七)などと謳歌するのでサウルはダビデを恨み妬みこの日から、彼を折あらば無き者にせんとたくらみ始めた。ところがサウルの娘ミカルがダビデを愛してやまないのです、サウルは一つの難題としてベリシテ人の陽皮百をもたらせと命じた。ダビデは難なく二百の陽皮を採って来た。今に王位を篡奪すると邪推したからである。頼朝が義経を恐れたのも同類である。

悪霊に憑かれていたサウルは折角慰めようとして立琴を弾くダビデを投槍で射し殺そうとしたこと再三。ミカルはダビデをある晩、窓から縋り降りして逃がしたり、ヨナタンは月朔の宴会を避けたダビデを「エセル」(「離別」の意)の石のはとりに隠し、矢の射程距離如何で危険を報せ、相抱き接吻し哭いて離れた。その時ヨナタンは右掲の熱い言を吐露した。

2月26日

流浪のダビデ(上)

(サムエル前書21-23:14)

アヒメレク、王に応答す、「汝の臣僕凡てのうち、誰かダビデの如く忠信なる！」(サム前三二・一四上)

ヨルダン下流の西方十五哩の山里ギベアはサウル王の居所だが、その南方三哩ほどのノブにダビデは先ず逃れた。ノブの祭司長アヒメレクはエリの曾孫であるが、サウル王の婿が単身で現われたのを訝った。祭壇の聖きパンを聖餐の如く食べて飢えを凌いだ。空手のダビデはアヒメレクからあのゴリアテの剣をもらって夢かと思ひ喜んで、ところがこの祭司の邑にサウルの牧者長エドム人ドエグというどす黒い人物がいるのでダビデは危険を感じ、はるか西方のベリシテのガテの王アキシのところへ亡命した。だが町の人にダビデたることを見破られることを懸念して狂人的なふるまいをして、すぐ此処を立ち去った。あのゴリアテとの一騎打ちをやった東方エラの谷の一角アドラムの洞穴に隠れた。ダビデの一族がサウルの悪政になやむ人たちと共に此処へ来て四百人ほどの群となった。彼はこんどは東方へ長駆して塩の湖の東岸モアブのミズバに通れた。が再びユダの地に帰った。サウルはアヒメレクを責めた。そのとき彼は右掲の如くダビデを弁護した。これがサウルの氣にさわり、例の黒幕ドエグに命じてアヒメレクを始め八十五名の緇衣エポデを纏う祭司、町民、家畜に至るまで殲殺させた。何たるサタンサウルぞ！ 唯だ一人祭司長の子アビヤタ難を遁れてダビデの許に走る。ダビデはケイラの民をベリシテから救ったが、裏切られ、六百人を伴れ流れ流れてヘブロン of 東南ジフの山野に屯する。

2月27日

流浪のダビデ(下)

(サムエル前書23:15-24:22)

「イスラエルの王は誰を追はんとて出でたるや。…死にたる犬か、

一匹の蚤か。」(二四・一四)

(二四・一七)

「汝我よりも義^{たぎ}し。我汝に惡を為^なせしに、汝善をもて報いたり。」

ダビデを心に懸けてやまぬヨナタンは、竟にジフの野にダビデの安否を訪ねに来た。しかし彼は信じ疑わないのでダビデに言った、「懼れるなよ、わが父サウルの手は君に触れ得ない。君はイスラエルの王となる……」(二三・一七)。ジフでの離別は竟に生き別れとなった。

ダビデとヨナタン、その深い熱い友情は真に刎頸^{なぐり}の交りで、かの中国戦国時代の趙の名將廉破と名臣藺相如の友誼を連想させられる。ダビデはジフからその南方マオンの野に移った。サウルの従者たちは速くもダビデの従者どもを包囲する態勢となった。この危機に当り、ベリシテの来襲の報せあり、サウルは急拠^{きょ}囲みを解いてベリシテ反撃に転じた。そこでその岩を「セラ・マレコテ」(離分の岩)と称えた。

ダビデは東方塩の湖に臨むエンゲデの要害に籠る。サウルは精銳三千を率いて、山羊の巖たる嶮処を尋ね、洞穴に入った。その奥には実はダビデと従者がいた。ダビデに敵は本能寺の心はなかった。エホバに祈注^{いのち}がれたる者に手をかけないダビデであった。洞穴から出て往ったサウルに「我主^{アドニ・ハメレク}、王よ!」と呼びかけてダビデは地に平伏し合掌した。かく叫んで、切った裾片^{すそ}を見せ、寸毫も殺意なきを示し、こんな死んだ犬や一匹の蚤のような私を何故追跡なさるか、と言った。その恭順な相^{すがた}を見、忠誠な言を聞いてサウルは右掲の言を放って「声をあげて哭いた。」

2月28日

「弓」の歌（前半）
（サムエル前書31—後書1）

嗚呼益荒男は仆れたる哉！
（サム後一・一九）

元 イスラエルの栄光は汝が高陵に屠られぬ

嗚呼益荒男は仆れたる哉！

二 これをガテに伝ふる勿れ、アシケロンの街に報する勿れ。

然かせばベリシテ人の娘ら歎ぶならん。

割礼なき者の娘ら有頂天とならん。

三 ギルボアの山々よ、汝らの上に露置く勿れ、雨降る勿れ、

また供物の畠も在らざれ。

⑤ サウル、ヨナタンの戦死した戦場

三 勇士らの盾は汚され、サウルの盾は油を塗られ得ざれば。

噴射貫きし者の血を呑までヨナタンの弓は退かざりき、

⑦ ヨナタンは弓の名手、ダビデにとってはヨナタンが弓か、弓がヨナタンかであった。

三 強者の脂喰はではサウルの剣徒らに帰らざりけり。

サウルとヨナタン相愛し、歎び合ひて

生くるも死ぬるも離れざり、

鷲より速く獅子より剛き彼らなりしぞ。

⑧ ヨナタンとダビデの関係はこの23節以上であった

2月28日

「弓」の歌（前半）
（サムエル前書31―後書1）

この弓の歌は士師記第五章の「デボラの歌」と共にヘブライ最古の名歌。ダビデはその後、なほサウルを避けてベリシテに亡命した（サム前二七章）。ベリシテの王アキシは北上してイッサカルのシュネムに陣を布いた。これに對してサウルはエズレルの谷を隔てた南方ギルボア山に對陣した。サムエルの靈現われてサウルに「エホバ汝を離れて汝の敵となり給う」という決定的な預言をした。（二八章）

2月29日

「弓」の歌（後半）
（サムエル前書31—後書1）

汝が愛は我に靈妙しく婦女の愛に優りたり（サム後一・二六下）

二 イスラエルの乙女らよ、サウルのために泣せよ、

彼は華美けき緋の衣を汝らに着せ、

⑨ 黄金の装飾を汝らの衣裳に着けし人なり。

三 嗚呼益荒男は戦のさなかに仆れたる哉！

ヨナタンよ、汝は高陵に屠られぬ、

四 兄弟ヨナタンよ、噫汝はわが悲嘆そのものぞ！

汝は我れに大いなる悦樂なりしに。

汝が愛は我に靈妙しく婦女の愛に優りたり。

五 嗚呼益荒男は仆れたる哉、戦鬪の器は失せたる哉！

⑩ 勿論人物のことである。

ギルボア山の決戦の記事サム前第三十一章を読者は是非読んで下さい。

この戦でサウルの子ヨナタンは戦死した。サウルはベリシテ軍に殺されるを非として自害した。サウルの侍従もその後を追って自殺した。その間ダビデはアマレク軍を撃破したのであったが、使者からサウル、ヨナタンの戦死を聞き、衣を裂いて悲しみ断食した。ダビデは挽歌をもってこの両者を弔った。それがこの「弓」の歌である。ヨナタン、彼の莫逆刎頸の友は弓の名手であったので、「弓」と題したに相違ない。自分を殺さんと追跡してやまなかったサウルに対して終始「敵は本能寺」を夢思はなかったダビデ！ この「弓」の悲歌は千古の名歌である。

⑨は戦利品にも関わりと解せられよう

⑩ダビデはヨナタンの友情に助けられて生命びろいをした。ダビデも深い情熱の人であった。